育成幼稚園　７月園だより

この世界に居続ける

園長　高地　敬

一休さんのとんち話で、「ふたを取らずに」というのがあります。

一休さんがある人に食事に招かれます。おぜんの上にはごちそうが並んでいます。「いただきます」……するとその主人は、「そのお椀の中身は、ふたを取らずに食べてください」、というので、一休さんは他のごちそうを食べてから、「お椀の中身はもう冷めてしまいましたから、ふたを取らずに温かい汁に変えてください」と言い、主人は、「参りました。ふたを取って汁を変えますから、ふたを取ってお食べください。」

ふたを取らずに食べられるのであれば、ふたを取らずに汁を変えられるはずだと言って、論理の矛盾と言いますか、相手の言い方の弱点を突いています。言葉遊びのとんちとは別の面白さがあります。ただ、一休さんのとんち話は江戸時代に作られたもので、実在の一休さんはそれより200年以上前の人です。禅宗の一つ、臨済宗の僧侶で、京都の大徳寺の大きな仕事をした人でしたが、当時、僧侶は独身でなければならないのに妻子がいたり、かなり破天荒な人だったので後の社会でも忘れられず、とんち話が作られるようになっていきます。

一休さんは、正しくは一休宗純ですが、こんな言葉があります。「仏界入り易く、魔界入り難し。」いろんな解釈があるようですが、仏界＝悟りを開いた人が行くところに行くのは簡単だけれど、魔界=この世にとどまるのは難しい。常識的には、仏界に入るのは難しくて、この世界にとどまるのは簡単だとなりますが、その逆を言っています。「この世界は苦しみや悲しみに満ちていて、私はその中に居る人たちを見捨てて仏界に入ってしまうことはできない。」一休さんの優しさがにじみ出ている言葉です。魔界にとどまり、人と一緒に苦労するのは実際にはとても難しいことだと思いますが、親子をはじめ、家族の関係もできる限りこのようでありたいと思います。